特色を示しながら展開している。特に竹並横穴群・前田山横穴群（行橋市）は大型宅地開発に伴う緊急発掘調査が行われ、現在は消滅したが、貴重な資料を提供している。

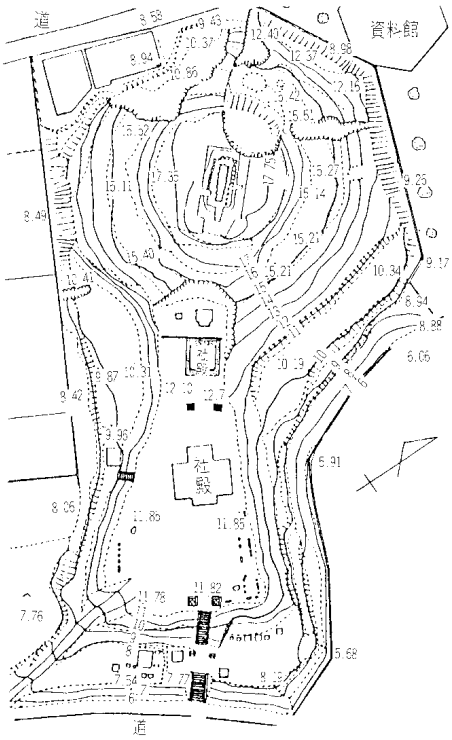
地下式横穴墓は、この地方では分布が極めて粗であり、苅田小学校校庭遺跡（苅田町）・尾花原遺跡（豊津町）など七か所を数えるに過ぎない。（第22表・第89図参照）

## 四　京都・行橋地方の主な古墳

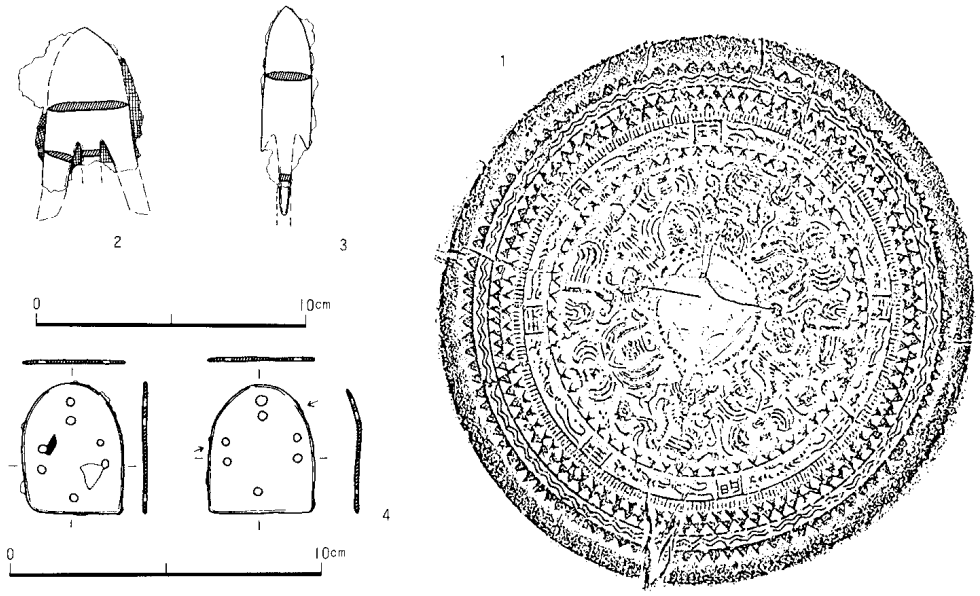
### ㈠　石塚山古墳（京都郡苅田町富久町　国指定史跡）

古式の前方後円墳で、緩やかに海に向かって下がる低丘陵上先端部に位置する。墳丘の全長約一一〇㍍、後円部の高さ約一〇㍍で二段に築造

第44図　石塚山古墳実測図



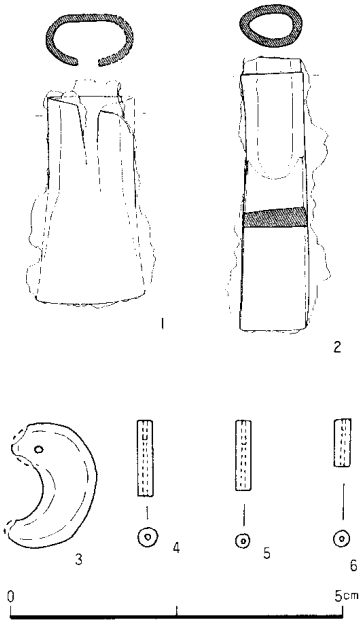

第45図　石塚山古墳出土品（一部）




1　三角縁獣帯文四神四獣鏡　2、3　鉄鏃　4　冑小札

（第44、45図は苅田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」苅田町文化財調査報告書第９集　1988より）

第46図　石塚山古墳出土品



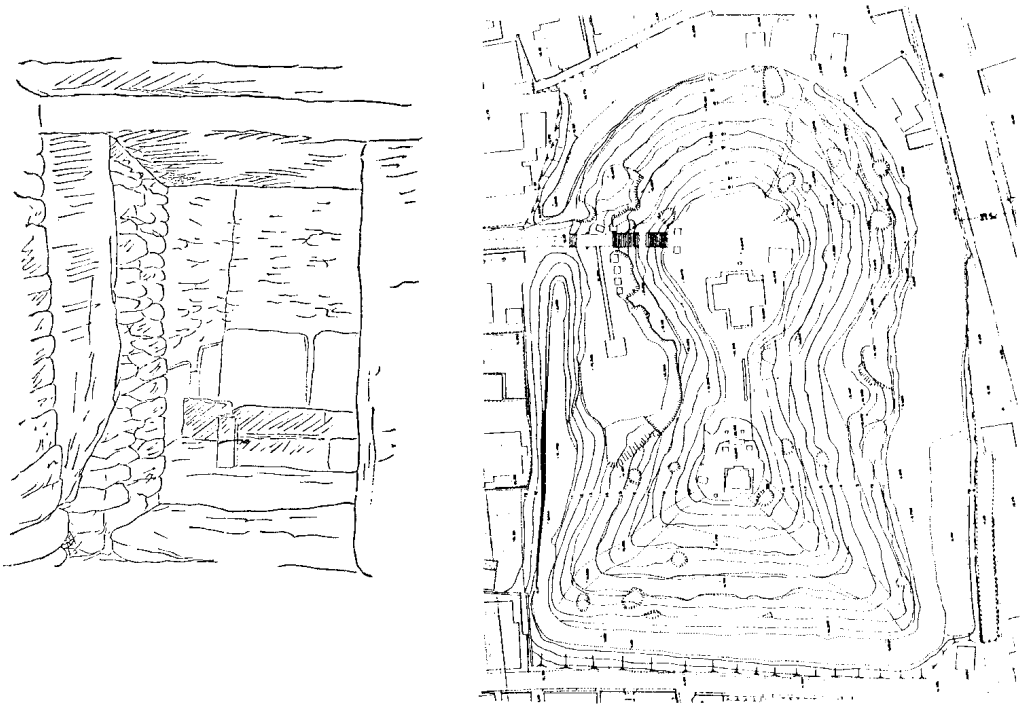

1、2　鉄斧　3　曲玉　4、5、6　管玉（苅田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」苅田町文化財調査報告書第9集　1988より）

される。寛政八年（一七九六）に開口し、与原庄屋銀助が藩にあてた書状に記録が残るが、三角縁神獣鏡七面（当時には一一面か一四面出土）、銅鏃一、素環頭太刀片一が伝えられてきた。鏡は京都椿井大塚山古墳、大分県赤塚古墳、福岡県原口古墳など各地の古式古墳出土のものとの同笵関係が見られる。昭和六十二年（一九八七）に後円部頂部の石室部分の調査が行われている。攪乱が激しく正確な石室の計測はできなかったが、石室の最大幅は一・四㍍と推定されており、その際に細線式獣帯鏡片・三角縁獣文帯三神三獣鏡片・勾玉・管玉・冑小札・刀片・鉄鏃・鉄斧・土器片などが出土している。四世紀前半の築造とみられている。（第44・45・46図参照）

### (二)　御所山古墳（京都郡苅田町与原　国指定史跡）

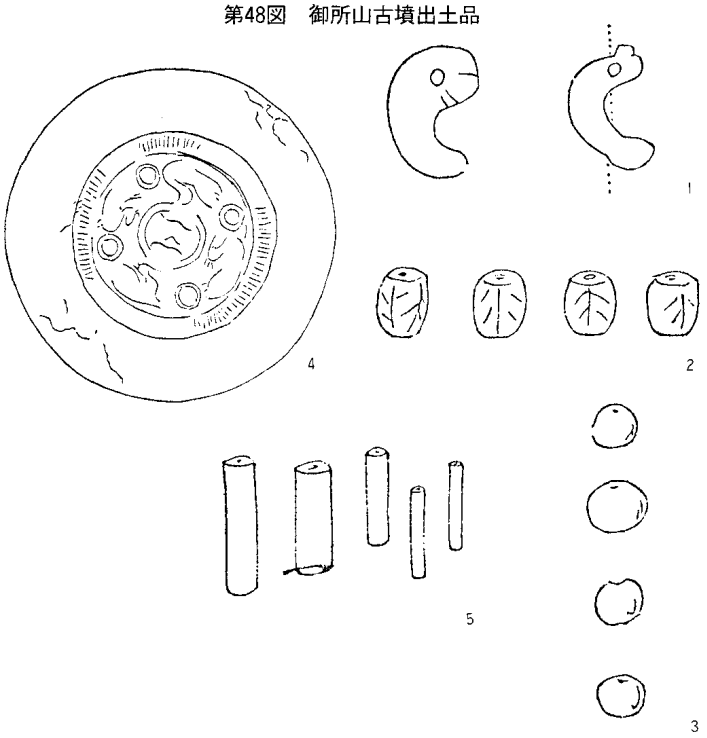
旧豊前国の範囲でも最大の前方後円墳。低丘陵上に位置し、墳丘の全長約一一八㍍、前方部幅八二㍍、後円部径七二㍍、くびれ部に造り出しが見られ、三段に築造される。墳丘をとりまいて盾形に幅約一〇㍍の周

第47図　御所山古墳実測図(右)　同石室スケッチ



（苅田町教育委員会「史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書」　1976より）

第48図　御所山古墳出土品




1　硬玉勾玉　2　硬玉棗玉　3　ガラス玉　4　四禽四乳鏡　5　碧玉管玉

濠がある。明治二十年（一八八七）に坪井正五郎博士が石室の調査を行い、スケッチが残されているが、後円部頂部に前方部に向いて入り口のある長さ四・七メートル・幅三メートル・高さ三メートルの石室がある。内部は板石一三枚をめぐらした障壁（石障）と仕切り石で区切られた二つの屍床が作られている。出土品としては、四禽四乳鏡・勾玉・棗玉・ガラス玉・金銅製雲珠などが記録されている。墳丘には埴輪列も見られ、五世紀後半の築造と推定されている。（第47・48図参照）

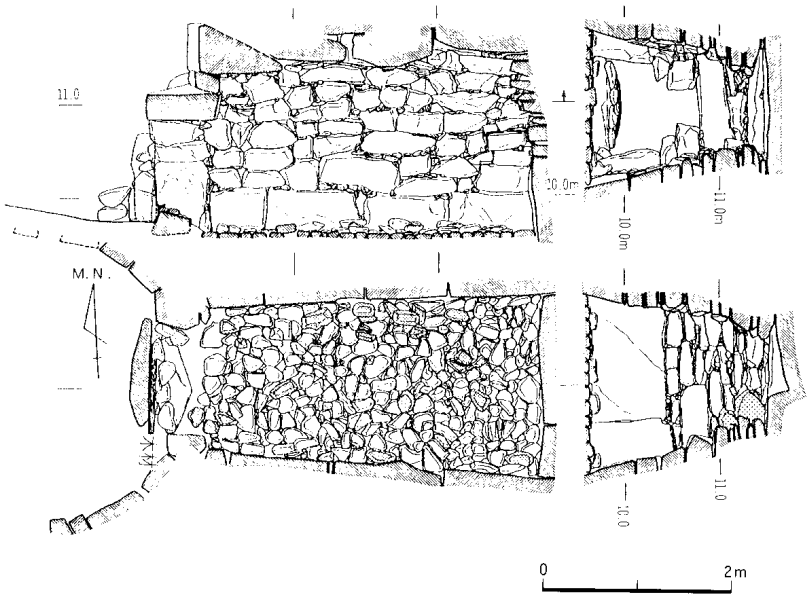
### ㈢　番塚古墳（京都郡苅田町尾倉　県指定史跡）

昭和三十四年（一九五九）、宅地造成中に発見された前方後円墳。前方部と後円部の大半が破壊されている。御所山古墳の北方約五〇〇メートルの低丘陵上に位置し、前方部を南に向ける。全長約四九メートル、後円部径約二八メートル、前方部幅約三四メートルの規模であったと推定されている。後円部に南北主軸に直行して西向きに開口する単室の横穴式石室がある。石室は長さ三・五メートル、奥壁幅二・〇メートル、高さ一・八メートルである。昭和三十四年の調査では次のような副葬品が出土している。

- 神人歌舞画像鏡一面（径二〇センチメートル）
- 装身具…玉、管玉、ガラス小玉（二〇〇〇個）
- 武器・武具…鉄刀、鉄矛、鉄鏃、挂甲（一領）
- 馬具…f字形鏡板付轡、剣菱形杏葉、木心鉄板張壺鐙、革留金具
- 飾金具…カエル形飾金具（蟾蜍）、帯金具（金銅製）
- 土器…須恵器（杯、杯蓋、高杯、壺、器台、水鳥形）
  土師器（壺、甕）

築造時期は五世紀末～六世紀初頭と推定されている。（第49図参照）

第49図　番塚古墳石室

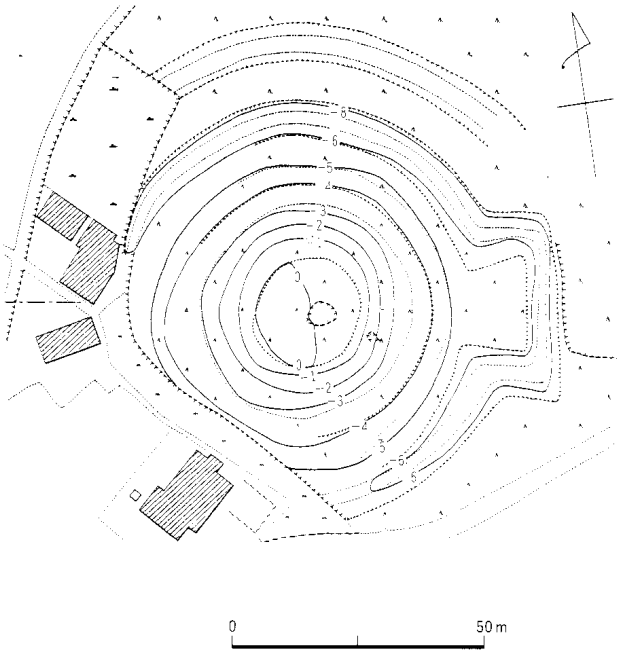



（苅田町教育委員会「番塚古墳」苅田町文化財調査報告書第20集　1993より）

## ㈣ 石並古墳（行橋市稲童）

周防灘に面した海岸に位置する。この地方では唯一の帆立貝式前方後円墳で、前方部を海側に向け二重の周濠をめぐらせる。全長六八㍍、後円部径五八㍍、前方部幅二〇㍍、後円部高さ五・五㍍で二段に築造される。墳丘上には葺石・埴輪列が見られるが、後円部頂部に陥没が見られ、直下に石室の存在を推測させる。未掘墳のため詳細は不明であるが、五世紀後半から末にかけての築造と推定されている。（第50図参照）

第50図　石並古墳実測図




（美夜古文化懇話会　「美夜古文化」18号　1976より）

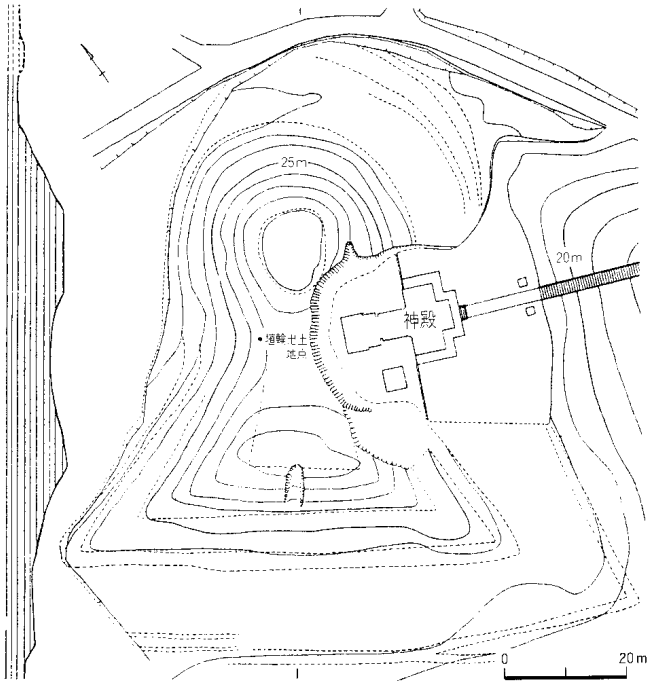
### ㈤　八雷古墳（行橋市長木　市指定文化財）

観音山から東に延びる丘陵の先端部で、長木（おさぎ）の平野部を見下ろす位置にある前方後円墳。未掘墳であるが、八雷神社建築の際に東側の「くびれ」部を中心に大きく削られている。周濠がめぐるが、土地造成のため西側は消失する。全長は約八〇㍍、後円部径約三九㍍、高さ約七・一㍍、前方部幅約七六㍍、高さ七㍍で周濠・周堤を含めると全長は約一〇〇㍍になる。人物埴輪と円筒埴輪が出土している。六世紀中ごろ前後の築造と推定されている。（第51・52図参照）

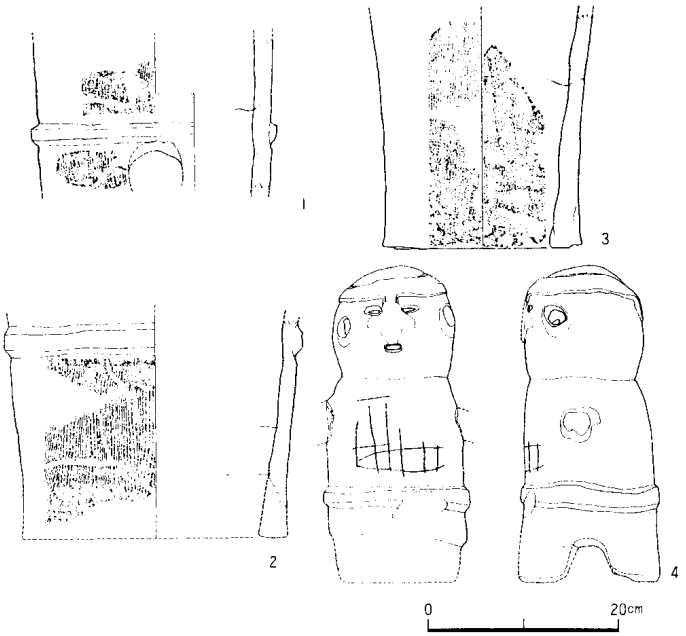
### ㈥　扇八幡古墳（京都郡勝山町箕田　県指定文化財）

障子ヶ岳山麓から東に向かって延びる低丘陵の先端部に位置する前方後円墳。北東部の周堤の一部が扇八幡神社の社地に削られるが、この地方では最も保存状態の良好な古墳である。全長は約五九㍍、後円部径約三五㍍、高さ七㍍、前方部幅約五八㍍、高さ六㍍で周濠と周堤がめぐ

第51図　八雷神社古墳実測図

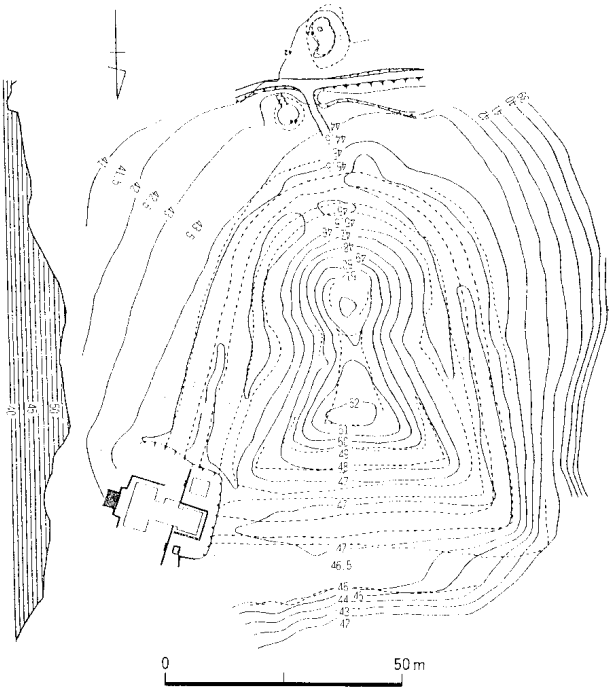



第52図　八雷神社古墳出土品




1、2、3　円筒埴輪　4　人物埴輪
（行橋市教育委員会「八雷古墳」行橋市文化財調査報告書第14集　1984より）

第53図　扇八幡古墳実測図

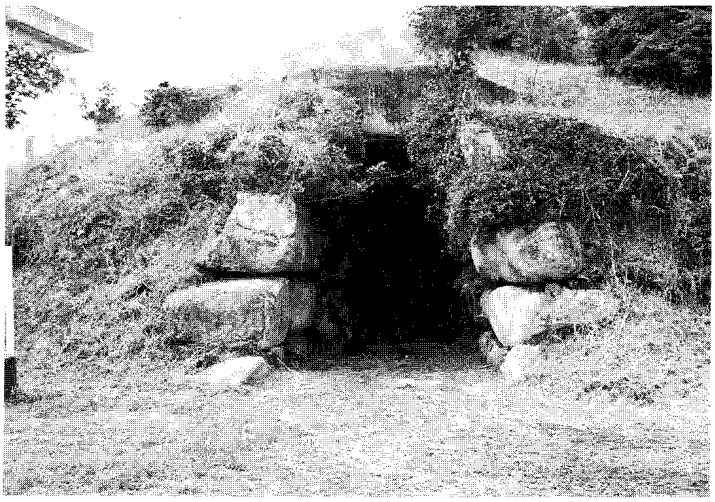



（福岡県教育委員会　「福岡県の史跡」　1977より）

り、これを含めると全長は約八三㍍になる。周堤上からは円筒埴輪が出土している。未掘墳であるため明確な時期の設定は困難であるが、六世紀前半代の築造と推定されている。（第53図参照）

### (七)　橘塚古墳（京都郡勝山町上黒田　国指定史跡）

黒田小学校の敷地内にある大円墳。墳丘は頂部や周囲を削られて変形するが、花崗岩の巨石で構築する石室はよく残存する。石室は複室構造の横穴式石室で、羨道部は一部が壊されているが、現状では全長約一六㍍を計る。古い開口と思われ、副葬品は不明。六世紀末の築造と考えられている。（写真10参照）



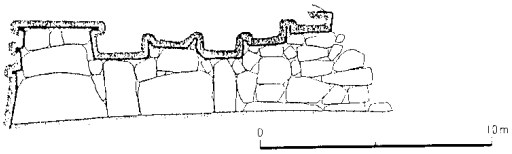
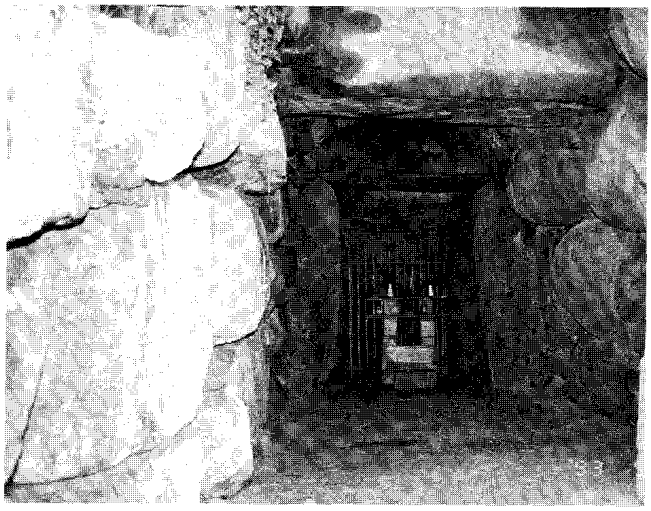



写真10　橘塚古墳
（橘塚・綾塚石室断面図は、北九州市立考古博物館「終末期古墳の世界」高松塚とその時代　1993より）

### (八)　綾塚古墳（京都郡勝山町中黒田　国指定史跡）

観音山から南に延びる山地の最先端部に位置する。自然地形を利用して山側を周濠で区切り、径四一㍍、高さ八㍍の墳丘を造りあげる。石室は花崗岩の巨石を使用して構築するが、全長二一㍍の複室構造の横穴式石室である。後室（玄室）には主軸に直行して家形石棺が置かれてい

る。古い開口で、副葬品は不明。六世紀末の築造と考えられている。（写真11参照）



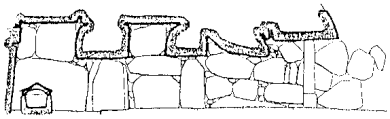


写真11　綾塚古墳

(九) **彦徳甲塚大円墳**（京都郡豊津町彦徳　県指定文化財）

錦原丘陵北部の鞍部に位置する大円墳。径二九メートル、高さ八メートルで二段に築造される。墳裾には二重の濠がめぐるが、これを含めると径は約五〇メートルになる。未掘墳であるため、時期の決定は困難であるが、六世紀後半代と考えられている。（写真12参照）

写真12　彦徳甲塚大円墳

(一〇) **甲塚方墳**（京都郡豊津町国作）

錦原丘陵の北端で八景山山麓部に位置する大形方墳。墳丘の規模は東西四六・五メートル、南北三六・四メートルの長方形をし、三段築成で高さは八・〇

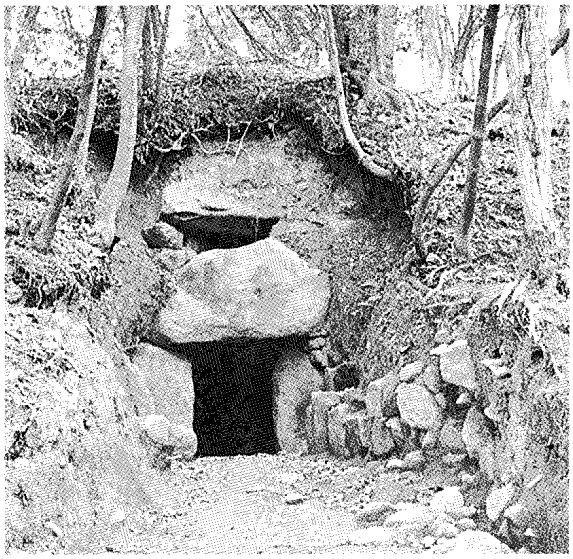
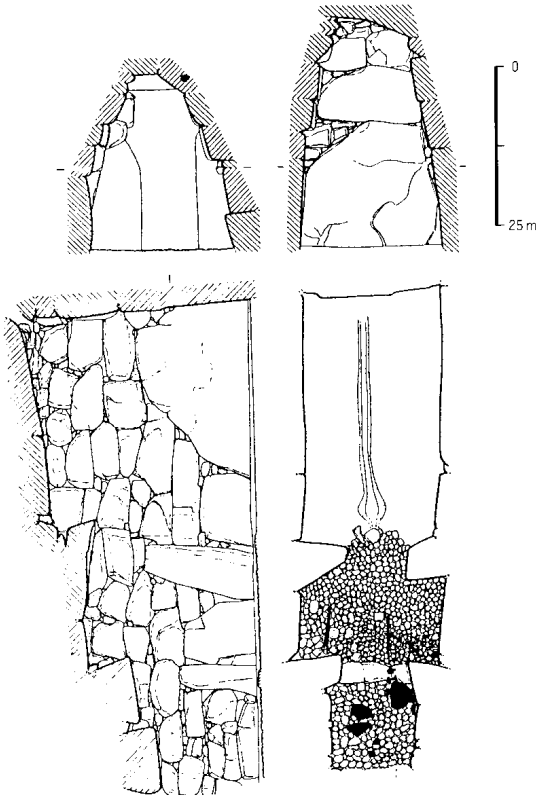


写真13　甲塚方墳

トルを計り周溝をめぐらす。石室は南に向け開口する複室構造の横穴式石室であるが、前室は石材が抜き取られて、側壁の一部と敷石が残る。後室（玄室）は奥行き約四・六トル、幅約三・七トルのほぼ正方形プランをとり、腰石の上に大きめの礫を穹窿状に積み上げ、隙間には粘土を充填する。高さは四・六トルで近隣の石室と比較しても特異な形状を呈している。六世紀後半に推定されている。（写真13参照）

### (二)　隼人塚古墳（行橋市高瀬）

覗山の山麓から西に延びる低丘陵上に位置する前方後円墳。民家の宅地内にあって開墾で周囲を削られているが、現状では全長約三九トル、後円径約一七トル、高さ五トル、前方部幅約一三・五トル、高さ三トルで石室は後円部南側に開口する。内部は複室構造の横穴式石室で、全長七トル、後室（玄室）は長さ四トル、幅二・二トル、高さ三・六トルであり、これに一・六トルの前室と一・四トルの羨道がつく。昭和五十六年（一九八一）、この古墳の環境整備による調査で、耳環・丸玉（メノウ製・ガラス製）・空玉（銅製、銀箔）・鉄鏃・刀子・直刀・馬具（轡・鐙）・鉄斧・砥石・須恵器（大型提瓶・小型提瓶・杯・壺蓋・高杯）が出土した。六世紀後半の築造と推定される。（第54図の1・2参照）

第54図の1　隼人塚古墳石室実測図